

第3章 地理歴史科・公民科の取り組み

I 昨年度の研究概要

地理歴史科・公民科では、昨年度「資料を活用する力を伸ばす工夫」というサブテーマで授業研究に取り組んだ。具体的には、日本史，世界史，地理，現代社会，政治・経済，倫理の各専門分野とも用語を教えて事象を解説する授業内容から，生徒が事象を観察して思考するものへ変えていこうと試みた。そして，資料から読み取る力，資料から読み取ったデータから推察する力，複数の資料を組み合わせる力など，生徒の思考力発展，センター試験の得点力向上の基礎となる力を育成しようとした。そのため，資料を活用する場面を授業中にどのように設定するか工夫してきた。

成果としては，生徒が授業中に思考する場面が増加し，資料を読み取ることに慣れ，自らの意見を持てるようになってきたことが挙げられる。教員にも思考をさせる場面を設定しようとする意識が高まった。課題は，思考場面を設定することと学習進度との調整を図るため，思考に適した教材や場면을精選することや学習を深めていくための発問について研究を進めることであった。

II 平成25年度センター試験の分析結果から

平成25年度のセンター試験問題（政治・経済）について，本校と全国の平均点比較を行うと以下のものであった。

全受験者の平均点 55.46点（受験者51,888人）

本校受験者平均点 53.10点（受験者 81人）

| | 第1問 | | | | | | | | | | 第2問 | | | | | 第3問 | | | | | | | |
|-------|-----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|-----|----|----|----------------------|----|-----|----|-----|----|----|----|----|----|
| 解答番号 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
| 全国正答率 | 44 | 56 | 23 | 51 | 46 | 45 | 53 | 55 | 13 | 64 | 55 | 47 | 67 | 40 | 60 | 15 | 46 | 56 | 40 | 59 | 38 | 72 | 80 |
| 本校正答率 | 51 | 65 | 24 | 57 | 49 | 42 | 59 | 53 | 16 | 70 | 59 | 47 | 65 | 44 | 58 | 22 | 44 | 42 | 42 | 56 | 36 | 63 | 86 |
| 本校-全国 | 7 | 9 | 1 | 6 | 3 | -3 | 6 | -2 | 3 | 6 | 4 | 0 | -2 | 4 | -2 | 7 | -2 | -14 | 2 | -3 | -2 | -9 | 6 |
| 差の合計 | 40 | | | | | | | | | | 11 | | | | | -22 | | | | | | | |
| | 第4問 | | | | | | | 第5問 | | | | | | 全国正答率は代ゼミの集計データによるもの | | | | | | | | | |
| 解答番号 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | | | | | | | | | | |
| 全国正答率 | 80 | 68 | 59 | 62 | 43 | 43 | 35 | 82 | 34 | 68 | 59 | 23 | 63 | | | | | | | | | | |
| 本校正答率 | 84 | 78 | 68 | 67 | 51 | 59 | 31 | 85 | 37 | 79 | 57 | 16 | 61 | | | | | | | | | | |
| 本校-全国 | 4 | 10 | 9 | 5 | 8 | 16 | -4 | 3 | 3 | 11 | -2 | -7 | -2 | | | | | | | | | | |
| 差の合計 | 48 | | | | | | | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |

設問別では，解答番号3（国際政治），9（地方自治），16（経済成長），35（国際政治）の正答率が全国・本校ともに非常に低いことが指摘できる。しかし，いずれの問題も，基礎・基本的な知識が問われているものであり，高度な論理的思考力を必要とする問題ではなく，受験生の学習不足が原因であると考えられる。

大問別では，全国と本校との比較において，第3問（国内・国際政治分野の総合問題）の差

が大きい事が指摘できる。これは、本校が政治と経済の学習順序を変えて、政治分野を後から教えていることが影響しているかもしれない（その証拠に、主として経済分野からの出題である第1・2・4問、第5問の一部は正答率が高い）。

一方、大問ごとに図表やグラフをもとに解く問題が必ず出題されており、解答番号4（経済成長）、13（社会保障）、18（選挙）、20（国際政治）、27（価格機構）、36（国際政治）のうち、全国の数値を上回っていたものは4と27のみで、あとはすべて下回った（-10ポイント/6問合計）。その中でも、全問題を通じて最も正答率が低いのが、解答番号18（-14ポイント）で、問題内容は衆・参両院選挙における一票の価値の推移を表すグラフの読み取りである。

今年度のセンター試験では、大問毎に必ず資料を用いた問題が出題されており、平成25年度センター試験『試験問題評価委員会報告書』において、問題作成部会が報告しているように、「現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせる」ためにも、「現代の諸問題や時事的現象」を取り上げ、「情報を主体的に活用する学習活動を重視する」という新学習指導要領に基づく流れは、今後も変わることがないであろう。

Ⅲ サブテーマの設定と研究授業に向けての授業観

以上のことから、昨年度の研究内容を引き継ぎ、今年度の研究サブテーマを「資料活用能力を伸ばす指導法の工夫」とした。現実の諸問題を分かりやすく伝えるためにはどのような資料を用いたらよいか、一つの資料からどのようなことが読み取れるのかということについて、言語活動を通じて生徒達の表現力や読解力を向上させることができれば、センター試験での正答率の向上にもつなげることができるであろうと考える。

Ⅳ 公民科研究授業学習指導案

- 1 日 時 平成25年11月7日（木）第5校時（13：40～14：30）
- 2 場 所 社会科教室
- 3 対 象 3年5H（普通科文型）41名（男子11名、女子30名）
- 4 単元名 選挙と政治意識

5 単元について

（1）単元観

本単元は、平成11年度版高等学校学習指導要領（平成11年告示）の公民の内容、政治・経済「（1）現代の政治 ア 民主政治の基本原則と日本国憲法」を受けて設定した。

本単元では、2時間で日本の選挙制度の歴史と現状を理解させ、日本の政治が抱える問題点と国民の政治意識についても考えさせる。これにより、生徒は民主的、平和的な国家・社会の有為

な形成者として必要な公民としての資質を養うことができると考える。

(2) 生徒観

このクラスは、全員が「政治・経済」を選択しており、その約7割が国公立大学への進学を希望している。「政治・経済」を公民の受験科目として利用しようと考えている生徒の数が多いため、補習受講者も3年生の中では一番多いクラスである。

素直で真面目な生徒が多く、授業態度は大人しいが、発問に対する反応が良いので、時にこちらの工夫次第では非常に盛り上がりを感じる授業となることもある。

(3) 指導観

センター試験には、毎年、大問ごとに図表やグラフをもとに解く問題が必ず出題されている。平成25年度センター試験・本試験では解答番号4（経済成長）、13（社会保障）、18（選挙）、20（国際政治）、27（価格機構）、36（国際政治）の計6問が出題されていた。

その各問について、本校生徒の平均点と全国（代ゼミデータ）のそれとを比較すると、全国の数値を上回っていたものは4と27のみで、あとはすべて下回った（-10ポイント/6問合計）。中でも、（全問題を通じて）最も正答率が低かったのが、解答番号18（-14ポイント）であった。このことから、資料活用問題に本校生徒が課題を抱えていることが分かる。

この課題を解決するためには、現実の諸問題を分かりやすく伝えることができるような資料を用いて、そこからどのようなことが読み取れるのか、また、どのような解決策が考えられるのかということについて、言語活動を通じて生徒達の読解力や表現力を向上させるような授業を展開できれば、センター試験での正答率の向上にもつなげることができるであろうと考えている。

6 単元の目標

- (1) 選挙が民主政治に果たす役割について考えさせ、民主的な選挙の諸原則について理解する。
- (2) 小選挙区制、大選挙区制、比例代表制を比較し、特徴を理解する。
- (3) 日本の選挙の歴史を学び、現行の衆議院議員と参議院議員の選挙制度について、その特徴を理解する。
- (4) 「一票の格差」など、日本の選挙の課題について理解させ、あるべき姿について考察する。
- (5) 政治的無関心及び無党派層の増加について、背景と問題点および改善方法を考察する。
- (6) 資料やグラフから読み取れることをグループでまとめ発表する。

7 評価規準

| 関心・意欲・態度 | 思考・判断 | 資料活用の技能・表現 | 知識・理解 |
|--|---|---|---|
| 国民主権の立場から選挙制度や政党政治などに着目し、望ましい政治の在り方や国民の政治への参加の在り方をめぐって客観的に考えようとしている。 | 各種の世論調査やメディアからの報道について多面的・多角的に考察し、国民として様々な価値観や利害を踏まえ、公正な判断をしている。 | 世論調査や各種統計について資料を収集し、収集した資料についてどのような政治の在り方がよいか適切に説明することができる。 | メディアによる情報の在り方、選挙制度や政党政治のしくみを理解し、その知識を身に付けている。 |

8 単元の指導計画（全2時間）

| 次 | 学習内容 (時数) | 評 価 | | | | | |
|---|----------------------------------|-----|---|---|---|--|---|
| | | 関 | 思 | 技 | 知 | 評 価 規 準 | 評価方法 |
| 1 | 選挙制度と選挙をめぐる諸問題 (1時間) (p61～63) | ○ | | | ◎ | <ul style="list-style-type: none"> ・ 国民主権の立場から選挙制度に着目し、望ましい政治の在り方や国民の政治への参加の在り方をめぐって客観的に考えようとしている。 ・ 選挙制度のしくみを理解し、その知識を身に付けている。 | (観)生徒観察 (ワ)ワークシート (考)考査 (問)問題集 |
| 2 | 投票率の低下と政治的無関心 (1時間) (p 63)…本時 | ○ | ◎ | | | <ul style="list-style-type: none"> ・ 各種の世論調査やメディアからの報道について多面的・多角的に考察し、国民として様々な価値観や利害を踏まえ、公正な判断をしている。 ・ 世論調査や各種統計について資料を収集し、それらをもとにしてどのような政治の在り方がよいか適切に説明することができる。 ・ 最近の選挙の動きに注目させ、その特徴から将来の有権者としての行動はどうあるべきかを考えようとしている。 ・ 選挙制度や政治的無関心の原因や、アナウンスメント効果についての知識を身に付けている。 | (観)生徒観察 (ワ)ワークシート (考)考査 (問)問題集 |

9 本時の展開

(1) 本時の目標

- ① 政治的無関心と無党派層の増加と背景と問題点について考えさせる。
- ② 資料やグラフから読み取れることをグループでまとめ発表させる。

(2) 観点別評価規準

| 関心・意欲・態度 | 思考・判断 | 資料活用の技能・表現 | 知識・理解 |
|---|---|--|--|
| 最近の選挙の動きに注目させ、その特徴から将来の有権者としての行動はどうあるべきかを考えようとしている。 | 各種の世論調査やメディアからの報道について多面的・多角的に考察し、国民として様々な価値観や利害を踏まえ、公正な判断をしている。 | 世論調査や各種統計について資料を収集し、それらをもとにしてどのような選挙の在り方がよいか適切に説明することができる。 | 選挙制度、政治的無関心の原因や、アナウンスメント効果についての知識を身に付けている。 |

(3) 学習の展開

政治・経済「投票率の低下と政治的無関心」学習指導案

| | 学習活動 | 資料 | 指導上の留意点 | 評価規準 (《観点》/《評価方法》) |
|------------|---|----------------------------------|---|-----------------------|
| 導入 (5分) | 1 インターネット選挙運動の導入 Q 1 : 今年7月21日に実施された第23回参議院選挙で導入された選挙運動の方法は何か? A 1 : インターネット選挙 Q 2 : 高校生はインターネット選挙運動に関わることができるか? A 2 : できない Q 3 : なぜインターネット選挙運動が解禁されたのだろうか? A 3 : 投票率を上げるため (選挙費用を減らすため) | ① ② 『教』 p63 | ・ インターネット選挙の概要について説明する。 ※H25.4.19公職選挙法一部改正 ・ 未成年とインターネット選挙の概要について説明する。 ・ 「投票率の低下」が日本の選挙をめぐる最も深刻な問題の一つであることを確認する。 | |

| | | | |
|---------------------|---|---|---|
| <p>展開 (35分)</p> | <p>2 選挙における投票率の推移 (1) 戦後国政選挙の投票率の推移 Q4: 次のグラフから読み取れることは何か? A4: 衆議院の投票率は1980年代までほぼ横ばいであるが、90年代に入り低下傾向。09年(第45回)の政権交代で一時盛り返したが、第46回衆議院議員総選挙の投票率59.32%は、戦後最低である。 一方、参議院のそれは、上下しながらも長期的には低下傾向にある。 Q5: 第46回では、なぜ投票率が最低を記録したのだろうか? A5: 民主党政権への不信感から自民党への高支持率が選挙前から報道されるとともに、選挙の争点分散化したため、盛り上がりに欠けたから。 Q6: マス・メディアが選挙結果の予測報道をすることによって、選挙結果が変化することを何というか? A6: 「アナウンスメント効果」 ・「バンドワゴン効果」 ・「アンダードッグ効果」 Q7: 投票率を上げるために、過去どのような取り組みが行われてきただろうか? A7: ・投票時間の延長(18時→20時 H10～) ・幼児、看護・付添同伴可能(H10～) ・期日前投票導入(H15.12～) ・郵便等による不在者投票導入(H16.3～) ・国外における不在者投票制度創設(H19.3～) ・成年被後見人の選挙権回復(H25.7～) (2) 投票率低下の要因(その1) ① 年齢別投票率の特徴 Q8: 次のグラフから読み取れることは何か? A8: 年齢が下がるほど投票率が低くなる(年齢が上がるほど投票率が高くなる)傾向がある。 ② 年代別選挙関心度の特徴 Q9: 次のグラフから読み取れることは何か? A9: 年齢が下がるほど選挙関心度が低くなる(年齢が上がるほど高くなる)傾向がある。 ③ 年代別政治関心度の特徴 Q10: 次のグラフから読み取れることは何か? A10: 年齢が下がるほど政治関心度が低くなる(年齢が上がるほど高くなる)傾向がある。 ④ 年代別投票意識の特徴 Q11: 次のグラフから読み取れることは何か? A11: 年齢が下がるほど「個人の自由」という意識が強くなる(年齢が上がるほど選挙は「国民の義務」であるという意識が強くなる)傾向がある。 ⑤ 年代別支持政党の特徴 Q12: 次のグラフにおいて、「支持政党なし」と「わからない」と解答する人々を何というか? A12: 無党派層(政党支持なし層) Q13: このグラフから読み取れることは何か? A13: 「支持政党なし」は、若い人ほど多く、高齢者に向うに従って減少していく。20歳代、30歳代では無党派層が半数を超えている。 ⑥ まとめ Q14: ①～⑤をまとめるとどのようなことが言えるか? A14: 年齢が下がるほど選挙、政治に対する関心、投票に対する意識も低く、無党派層が多いため投票率が低くなる。そのことが社会全体の投票率低下の大きな要因となっている。 Q15: 次のグラフにおいて、「選挙にあまり関心がなかったから」、「政党の政策や候補者など違いがよくわからなかったから」という選挙の棄権理由は、グラフ中の(a)、(b)のどちらにあてはまるか。また、その理由は何か? A15: a…「選挙にあまり関心がなかったから」 b…「政党の政策や候補者など違いがよくわからなかったから」</p> | <p>『資』 p130 ② ・衆・参両院の投票率の推移傾向を大まかに把握させる。 ・09年の第45回は90年代以降では最高の69.28%。 ・グループで議論し発表させる。 ・解答がでないようであれば解説する。 ・バンドワゴン効果…投票者が勝ち馬に乗ろうとして、優勢だと報じられた候補に投票すること。バンドワゴンとは、行列の先頭の乗隊車のこと。 ③ ・アンダードッグ効果…劣勢と報じられた候補者を助けようとする投票が増えること。いわゆる「判官びいき」の心理。アンダードッグとは負け犬のこと。 『資』 p130 ② SQ:投票時間は何時までですか? SQ:投票日当日、仕事がある場合は? ③ ・グループでまとめ発表させる。 ④ ・グループでまとめ発表させる。 ⑤ ・グループでまとめ発表させる。 『資』 p126 ④ ・政治的無関心(リースマン[※]の分類) ※アメリカの社会学者(1909-2002) 伝統型無関心←無知 現代型無関心←政治的無力感・不信感 ⑥ ・グループでまとめ発表させる。 ⑦ ・グループでまとめ発表させる。 ⑧ ・2(2)⑥から得られる知識を用いて類する。aは、年齢が下がるほどグラフ伸びているので、若者に特徴的な事柄あると考えられる。</p> | <p>「各種の調査結果について多面的・多角的に考察し、最近の選挙の特徴について分析することができる。」 《思・判》(観、ワ)</p> |
|---------------------|---|---|---|

| | | | |
|---------------------|---|---|---|
| | <p>⑦ 投票所までの距離と投票率 Q16: 次のグラフから読み取れることは何か? A16: 投票所までの距離が遠いほど、投票率が下がる傾向がある。</p> | <p>⑨ ⑩</p> <ul style="list-style-type: none"> グループで議論させ発表させる。 経費削減のため、投票所数が全国的に減少中。投票率の向上を目指すのであれば、有権者の投票環境を確保する必要がある。それが困難であれば、他の投票手段の導入を検討する必要がある。 | |
| <p>終結 (10分)</p> | <p>3 投票率向上への対策</p> <p>Q17: インターネット選挙導入の結果、第23回参議院議員選挙の投票率は向上しただろうか? A17: 向上しなかった。52.61%(前回比-5.31)で戦後3番目の低さ。</p> <p>(1) インターネット選挙運動の影響 Q18: 次の表において、ネット情報を参考にした割合を示しているのは(a), (b)どちらか? A18: (a)。ネット情報が余り参考にされていない。</p> <p>(2) インターネット選挙運動の可能性 Q19: 次の表において、当選落選の原因となった理由は何であると思われるか? A19: 有権者とのネットを通じた交流の度合い</p> <p>Q20: 次のアンケート結果から言えることは何か? A20: 選挙期間中に政党・候補者が発信したインターネット情報を見た人の割合は少ないが、情報に触れた人のインターネット選挙運動に対する肯定感、及び、政治的関心は高い。</p> <p>Q21: 次の調査結果から言えることは何か? A21: 年齢が下がるほどインターネット選挙運動への肯定感が強い。</p> <p>(3) 投票率の向上に向けて Q22: 資料⑬, ⑭から言えることは何か? A22: 若者などがインターネット選挙情報に触れる機会を増やせば、投票行動が変わり、投票率も向上する可能性が高い。</p> <p>Q23: 有権者がインターネット情報により触れるようになるためには、どのような工夫が考えられるか? A23: インターネット投票の解禁など</p> | <p>⑪ ⑫ ⑬ ⑭</p> <ul style="list-style-type: none"> 最低は95年の44.52%。 インターネット選挙運動は投票率向上の救世主とはなっていない。 2(2)⑦で触れた「投票所の減少」という点からも、インターネット投票の可能性について触れる。 | <p>「最近の選挙の動きに注目させ、投票率の向上のために、国民として何ができるかを考えることができる。」 《関・意・態》 (観, ワ)</p> |

【資料一覧】

- ① 総務省HPより
- ② 総務省HPより
- ③ 財団法人明るい選挙推進協会『第46回衆議院議員総選挙全国意識調査 調査結果の概要』平成25年7月, p17
<http://www.akaruisenkyo.or.jp/wp/wp-content/uploads/2013/06/070seihon1.pdf>
- ④ 同上, p22
- ⑤ 同上, p23
- ⑥ 同上, p25
- ⑦ 同上, p27
- ⑧ 同上, p39
- ⑨ 同上, p32
- ⑩ 同上, p33
- ⑪ 共同通信, 読売新聞・日本テレビ系列の出口調査(H25.7.21)による
<http://www.nippon.com/ja/features/h00035/>
- ⑫ 朝日デジタル「(ビリオメディア) ネット選挙、名前連呼より大事なもの」2013.7.26
<http://www.asahi.com/senkyo/articles/TKY201307260007.html>
- ⑬ 電通PRと東大橋元研究室がネット選挙に関する共同調査実施
http://www.dentsu-pr.co.jp/releasestopics/news_releases/2013_07_24.html
- ⑭ 財団法人明るい選挙推進協会『第46回衆議院議員総選挙全国意識調査 調査結果の概要』平成25年7月, p66

V 研究授業後の取り組み

1 研究協議について

研究授業を終えて、協議された内容の一部を次に示す。ここでは、生徒の資料読み取り能力を伸ばしていくための方策について話し合われた。

| | |
|-------------------------|---|
| <p>授業者より 指導の工夫等</p> | <p>本校の生徒の課題として、資料問題の読み取り能力が挙げられる。ICT を活用しながら、グループワークをなどの言語活動を通じて、生徒が主体的に読解力や表現力を向上させるように工夫した。課題として、投票率の低下についての対策を考える部分のグループ協議に時間がかけられず、議論が深められなかったことが次回への課題である。</p> |
| <p>協議・助言等の内容</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・仮説・検証型の授業であった。資料活用に課題があるという本校生徒の実態から、多くの適切なデータを生徒に提示し、しっかり考えさせ、自分の意見を表現させ、効果があったと考えられる。また、生徒に考えさせ、表現させるところで、自分の考えを「文章で書く」という場面を設定することが大事である。書くことによって、生徒は自分の考えを明確にし、意見をお互いに交わせることができる。文章で自分の考えを表現させることは日常の授業の中で取り入れていってほしい。 ・生徒に身近なインターネットの話題は、実際に授業でも生徒の反応がよかった。その一方、インターネット投票など生徒の知識があいまいであることも授業から明らかになる中で、なぜ今インターネット投票が話題になっているかなどインターネットに関わる切り口から、投票率低下の問題点を考えさせるという方法も有効であるのではないかな。 ・意見発表をする際に、ある程度型にはめて、発表者や発表の仕方などを授業者が提示してやることで、意見を深めていくことができるのではないかな。 ・投票率が下がっていくことについて、自分の問題として考えるように考えさせる必要がある。投票に行かないという問題の重みを生徒にもっと考えさせねばならない。 |
| <p>今後の課題</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・センター試験の正答率を上げるためには、必要な知識が定着していないのか、資料が読み取れないのか整理して指導する必要がある。 ・グラフなどのデータの読み方に、今後も日常的に触れさせる事で慣れさせることが大事であるとともに、読み取ったデータを文章化することや、発言を定型化することでデータの読み取りを訓練していくことが必要である。 |



2 ポスト研究授業について

研究授業後、「資料を活用した授業改善」をテーマとした授業改善を継続して行った。

科目名【 地理 A 】 授業者名【 石井 】 観察者名【 小林 】
 平成25年 12月 18日 水曜日 6限 授業クラス 2年 8H (38名)
 研究主題 サブテーマ等 【 資料を活用した授業改善 】

- ・ 授業の流れ（導入，展開，まとめ）の概要
- ・ 以前学習した気候区の特徴，区分の方法を思い出してみよう。
- ・ 気候区分の数値を思い出し，表内の数値をグラフ化してみよう。グラフの特徴から，それぞれの気候区分けを行ってみる。
- ・ ロシアの気候区を色分けし，D気候とE気候を分ける等温線の意味を考えてみる。
- ・ オーストラリアの気候区を色分けし，問題となる等温線が，夏冬何度を表すかを，色分け区分から考えてみる。各気候区の区分の背景を予想してみる。

2. 工夫した点（研究主題より）

・ 気候の数値をグラフ化して，区分となる数値をグラフの中から読み取ることで理解しやすくなる
 地図上で気候区を色分けし，等温線を記入することから区分の意味合いを推測する。また，南半球を題材とすることで，より難化される。

観察者記入

3. 工夫した点がどうであったか。

- ・気候区分において基準となる気温を記入するグラフに明示することで、気候区の判別がやりやすくなり、効果があった。
- ・D・E気候の区分線が気温だけでなく、植生・農業・人間生活などさまざまな分野での境界線となっていることを理解させることができた。景観のパネル提示も効果的であった。
- ・北半球での気候のイメージが、南半球では逆転することを具体例で示せた。

4. 自由意見（研究主題より）

- ・これまで学習してきた気候区分が、統計でよく出題される夏と冬の等温線と関連していることを理解することで、応用力がついたと実感できたのではないかと考える。
- ・南半球を想像することは、逆に発想する方法が必要で、思考力を付けることになる。

VI 今年度の研究を終えて

昨年度、地理歴史科・公民科では「資料を活用する力を伸ばす工夫」というサブテーマで授業研究に取り組んだ。解説型授業から思考型授業への転換、読み取る力や推察する力の育成、センター試験の得点力向上につながるよう、資料活用場面をどう設定するか工夫してきた。この結果、生徒は読み取りに慣れ、教員にも授業における思考場面設定の意識が高まった。

また、平成25年度センター試験の結果から見ると、本校生徒のみならず全国的な傾向においても、論理的思考力が十分に育っていない傾向が指摘できる。授業において思考する場面の設定やその工夫が求められる結果となった。

よって、本年度は「資料活用能力を伸ばす指導法の工夫」をサブテーマとし、言語活動を通じた表現力や読解力の向上や適切な教材や場面の精選など、研究課題に取り組んだ。

研究授業後の検討を経て実施したポスト研究授業では、地理A「気候区分」を取り扱った。気候区分の数値をグラフ化し、グラフの特色からあらためて気候を区分けしてみる。気候区を色分けし、等温線を記入する。以上のような作業から気候区分の意味を考え、気候区分の理解を深めることに取り組んだ。結果として生徒の気候区分の理解が深まり、気候だけでなく植生・農業・生活など多方面への影響も思考しやすかった。また、作業を通じた理解であったため、生徒の気候区分への理解が具体的であり、南半球が北半球と逆の季節になるということも容易に理解できた。

この授業は既存の教材の取り扱い方を工夫した内容となっている。既習の気候区分について、その意味を感じ取らせ、考察することで、普段学んでいることにより深い意義を発見させる取り組みを行っている。観察者からも、気候区分特有のパターンについて明確になった、気候の区分

線が農業等の境界線となっていることが分ったなど、生徒の理解が深まる授業であったという意見が述べられている。

一方で、教材や思考場面の精選という観点では、授業展開のスピード、学習する分量をいかに増加させるかといった面でさらなる工夫が必要であろう。

とはいえ、今回の研究授業・ポスト研究授業から、生徒が主体となってものごとを分析・思考することが深い理解や知識の応用力を育成するということを改めて感じさせてくれた。今後は、提示方法を工夫することによって、生徒が興味を持って思考するような学習活動をつくりあげていきたい。